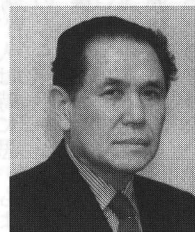


琉球の「万国津梁」精神を生かす東アジア歴史和解の訴え
——「主権回復記念式典」の落とし穴——

ジャーナリスト 松尾文夫



この稿が皆様の目にとまる頃には、既に過去の出来事として忘れられているかもしれない。しかし、私はアベノミクスの大胆な展開で高支持率のスタートを切った安倍政権が抱えている、より根源的な課題と結びつく出来事だと考え、あえて書かせていただく。四月二十八日に憲政記念館で両陛下ご臨席のもとで行われた「主権回復・国際社会復帰を記念する式典」をめぐって露わになった本土と沖縄との深い亀裂についてである。三月七日の衆議院予算委員会では安倍首相はこの記念式典について初めて発言し、「一九五二年四月二十八日にサンフランシスコ平和条約が発効してから六〇年。若い世代の中には、日本が主権を失っていた占領期間があったことも知らない人たちが増えている。憲法や教育基本法もその期間にできたわけで、このことをしっかりと認識する節目の日にしたい」とその意義を語った。

●沖縄県知事、欠席の重さ

式典自体、自民党の昨年末の衆議院選挙公約に沿ったも

ので、その限りでは「約束したことは必ず守るのが安倍内閣」と胸を張れるものだった。しかし、その足元に落とし穴があった。安倍内閣の登場で辺野古への普天間基地移設強行の気配が漂い始めた情勢に反発を深めていた沖縄世論を強く刺激したからである。沖縄にとっては、日本が主権を回復した記念日はその後二〇年間も米軍統治下に留め置かれた「屈辱の記念日」だったからである。七日の衆議院予算委員会での首相発言は、なぜかこの沖縄との落差に一切触れなかった。

安倍首相はその後、ことあるごとに「沖縄や奄美や小笠原の苦難の歴史」に触れ、取り繕うのに懸命だった。しかし、仲井眞沖縄県知事は四月一〇日、正式に式典欠席を決めた。三月二〇日付の朝日新聞朝刊によると、安倍政権内でも「首相は最初の答弁で沖縄に触れるべきだった」との声が上がり、首相周辺も「不注意から失敗した」と率直な反省の声が出ているという。沖縄現地では、閣議決定に基づく両陛下の御臨

席に安倍政権による皇室の政治利用などの批判さえ出ている。本稿では、この安倍政権の「つまずき」自体は論じない。稿を改めて「落とし穴」の深刻さを報告したい。ここでは逆に、長期政権の展望も見てきた安倍政権に対して、沖縄を軸とする東アジア全体の歴史和解の達成という大きな、それこそ独立後六一年も経ちながらも未だに果たしていない歴史的な課題に挑戦することを提案したい。

ふと気がつく、東アジアでは日本をめぐって異常な、とても祝える状態などではない事態が進行している。北朝鮮の「予測不可能な」脅威の中で、日本が中国、韓国と領土問題や靖国参拝を始めとする歴史問題でいつまでもぎくしゃくした非正常な関係が続け、二〇〇八年以来、持ち回りで続いていた日中韓首脳会談も今年はまだ開催のメドが立っていない。しかもその真ん中に位置する沖縄と日本本土は、突き詰めると日米同盟をめぐる温度差にまで行き着く深い亀裂をかかえる。尖閣諸島を意識して、漁業水域拡大で日本が台湾側に大幅譲歩した合意が沖縄の頭越しで行われたこともあって、沖縄現地の怒りは沸とう点に近いという。独立記念式典への沖縄県知事欠席は、その象徴的な出来事だった。

●日中韓首脳会談を沖縄「万国津梁館」で

従って、こうした国内では沖縄との亀裂、国外では中国、韓国との対立という閉塞状況に一緒に風穴を空ける一手として、沖縄の人びとがその実績を誇りにする琉球王国時代

の「万国津梁」精神に、歴史和解の突破口を求めているのはどうだろう、というのが私の拙案である。

「万国津梁」精神とは一四五八年に尚泰久王が铸造させ、首里城正殿に掲げた鐘に刻まれた銘文で、「琉球国は東アジアの真ん中にあり、朝鮮、中国、日本とも親密な関係にある蓬萊の島である。船を操って世界の架け橋となり、めづらしい宝は国内に充ち満ちている」と書かれているテーマである。日中韓のみならず、全ての国と仲良くする交易立国の宣言であった。

この精神の延長で、アメリカも加えた東南アジア全体の和解の構築が可能ではないだろうか。今中国、韓国、そして北朝鮮にさえ、沖縄の米軍基地への反発はない。むしろ日本軍国主義復活の悪夢に対する「安定剤」としてアメリカ軍駐留を歓迎する空気さえある。後は沖縄県民がアメリカ軍基地の「整理整頓」を条件にそれを「必要悪」として受け入れるかどうかである。

少なくともアメリカも抱きかかえた「万国津梁」の価値をかみしめるためにも、日本が主権国である来年の日中韓首脳会談を沖縄名護市の東シナ海が眼下に広がる「万国津梁館」で開いてみたらどうだろう。二〇〇〇年のG8サミットが開かれた場所でもある。

今求められているのは、「不注意からの失敗」に学ぶこうしたイニシアチブだと思う。

(二〇一三年五月二〇日記)